特集
地域に元気を生みだすスポーツチーム

取材・文　神野武美　フリージャーナリスト

「白浜チームタイムトライアル」（写真提供：シクロワイアード・高木カメラマン）

サッカー
バスケットボール
自転車ロードレース
地域密着型チームの挑戦

「プロスポーツ不毛の地」だった奈良県も近年、アマチュアのサッカーJFLからJリーグ昇格を目指す奈良クラブや、来年度からプロバスケットボール・トップリーグ2部となるバンビシャス奈良、ジャパンプロツアーに参戦している自転車ロードレースのシエルヴォ奈良などが活躍している。

それぞれ「スポーツ発信型地域文化コミュニティクラブ」（奈良クラブ）、「地域が一つにまとまれる共有文化」（バンビ）、「地域密着型のチーム」（シエルヴォ）を理念に掲げ、地域社会に貢献し共に生きることを目指す。それに対し、県内の多くの中小企業が資金を出し合い、選手を雇用する形でチームを支えている。プロスポーツが盛んになれば地域社会の連帯感が高まり、地元経済を活性化する効果も期待されている。その現状と課題をレポートする。（敬称略）

「夢づくり・町づくり・人づくり」で地域に浸透する応援文化を熟成

JFLに昇格し、J3を目指す 奈良クラブ

「地元・奈良を誇りに」

奈良クラブは2016年のJリーグ入りを目指しています！

今年行われた第20回奈良県サッカー選手権大会決勝戦（天皇杯代表決定戦）でV7を達成した奈良クラブ。また、第70回国民体育大会（9月26日から10月6日・和歌山県にて）では、奈良県代表成年男子の部において、奈良県より30年ぶりの本戦出場を果たし、3位に入賞した。

ミニゲームで保育園児とボールを追う塚本翔平選手（手前）、後は野本泰崇選手と高谷郁弥選手（左から）＝奈良市の「こだま保育園」

地域社会の福祉に貢献するサッカーと奈良クラブ

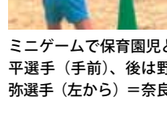
奈良市あやめ池北2丁目のこだま保育園（國原智恵園長）の園庭では、約20人の園児たちが楽しそうにサッカーボールを追いかけていた。

ビブスを着た園児が勢い良くゴールに蹴り込むと、「ナイスシュート！」、キーパーがそれをはじき返すと「ナイスセーブ！」と声をかけるのは、奈良クラブの塚本翔平（31）＝MF、野本泰崇（やすたか）（29）＝DF、高谷郁弥（ふみや）（23）＝DFの3人の選手だ。園児らは、地面に転んでもすぐに起き上がり、顔面にボールが当たっても平気な顔。十数分間のミニゲーム中、全員が元気に走り回っていた。

園児たちが試合の観戦に来てくれる

3人は同保育園の職員として午後1時半から7時半まで勤務する。園児とサッカーするのはそのうちの毎週1回。3人は学童指導員も兼ね、同保育園が、園内と近隣の近大付属小で行っている学童保育も担当している。サッカー以外にも体操を指導したり、宿題を見てやったり。塚本は「ホームゲームでは毎試合、保育園児や学童保育の児童が応援に来てくれます。子どもたちから元気をもらっています」と話した。

塚本翔平選手



野本泰崇選手

高谷郁弥選手

「子どもが好き」という3人はクラブ入団時、矢部次郎GM（37）や先輩たちから勧められ、保育園に勤めるようになったが、それまではサッカー漬けの人生だ。ここに就職して3年目の野本は当初、子どもたちには笑顔で接していても、保護者対応となると緊張してしまい、お母さんたちから「あの先生笑うのですか？」と言われたこともあったという。

試合の後はサッカー教室を開くなど、創立時から子どもたちとの交流を大切にしてきた。

「夢づくり、町づくり、人づくり」のNPO法人

矢部次郎 GM

奈良クラブは、トップチームは約30人。その下に「セカンド」の社会人チーム、さらに大和郡山と奈良市内に計3つのサッカースクール、電動車いすサッカーのチームもあり、年齢別のジュニアチームなど選手など総勢約300人。オーナー企業も経営者もいない、「夢づくり、町づくり、人づくり」という理念に集う「ソシオ」（スペイン語で「仲間」）でつくるNPO法人である。

関西社会人リーグ1部だった2014年7月、天皇杯2回戦で、J1のベガルタ仙台を2−1で破る快挙を成し遂げた。JFLには今年から昇格し、リーグ戦ではJ3を狙える4位までに「あと一歩」の位置につけている。J3はプロだが、JFLはアマチュア。選手たちは、丸産業、大和農園など県内の約20社に就職し、平日の午前中は、田原本町の県フットボールセンターで約1時間半練習し、午後1時半から勤務に就き、そして週末はホームゲームか、遠征に行くという生活である。

矢部GMは「奈良クラブの紹介で来た人は裏切らない、と就職先の企業からも評判が良い」と胸を張る。それは「サッカーを通じた人間教育」という目標を実践しているからだと自負している。矢部は「サッカーは、技術を習得するには大変努力の要る難しいスポーツ。それにプレー中は誰でもミスをします。ただ、ミスしてもうな垂れたり他人のせいにしたりしないで、諦めず自分で取り戻そうとする心が必要です。ひたむきに日々精進しないとやれないスポーツなのです」と話す。サッカーは、相手の心理や味方の思いを慮るなかでプレーをするが、それは「福祉」にも通じるようである。

「ぷろぼの」で働く馬場悠、林佳祐、堤隆裕の各選手（左から）＝奈良市の「ぷろぼの」本部

選手らの「体幹トレーニング」を福祉に活用

障がい者の就労自立を支援する福祉グループ「ぷろぼの」（山内民興理事長、社会福祉法人及びNPO法人、本部・奈良市）にも、馬場悠（28）＝MF、林佳祐（27）＝DF、堤隆裕（25）＝FWの3人が3つの事業所に分かれて働いている。計4つの事業所には計約80人が訓練や就労のために通っている。月曜が休みのため選手たちは、火曜から金曜の午後1時半から5時45分という短時間で、パソコンを教えたり、会計帳簿の入力などの作業を指導したりするほか、サッカー教室も開いている。選手の短時間勤務は、一般の会社では受け入れがたい面もあるが、「ぷろぼの」では「何の問題もない」と言う。「ぷろぼの」の各事業所で雇用している障がい者にも、心身の状態に応じた短時間勤務をしている人が多いからだ。

サッカー選手を雇用するメリットも感じているという。一つは、利用者への精神的なプラス効果である。利用者の5、6割は精神障がいや知的障がいがある人たち。地域社会でも孤立しがちで、「休日に何をしていいかわからない」「行く場所がない」という悩みも抱えている。そこで、身近にいる選手たちが出場する奈良クラブの試合の応援に行けば、気分を発散させ、応援を通じて人と話す機会もできる。もう一つは、選手たちが行う「体幹トレーニング」を工夫して活用すること。利用者の中には、体全体に歪みを抱えている人も多い。体を動かすくせや力が入らないなどの問題をトレーニングで治し、体のバランスをよくすること

主要駅前で試合の告知活動

今シーズンのホームゲームは残り3試合

10.18	日 13:00	橿原公苑 陸上競技場
11.1	日 13:00	橿原公苑 陸上競技場
11.8	日 13:00	鴻ノ池 陸上競技場

キックオフ直前、気合いをこめる先発メンバー。

ができるというわけだ。

一方、大和八木事業所（橿原市）に勤務する馬場は「これまでサッカーしかしてこなかったが、訓練生の方と接してみて、健常者と変わらないではないかと感じています。仕事でできた責任感がプレーでも生かせるようになったと思う」と話す。

「奈良市ポイント」1観戦当たり100点

パートナーやソシオとして奈良クラブを支援するスポンサー企業は約200社あるが、基盤はまだ脆弱だ。J3に昇格するには、観客数が1試合平均2千人以上必要だが、夏場に見た試合では1500人に達しなかった。サポーターが指摘するのは、「鴻ノ池陸上競技場に照明塔がないため夏の試合は炎天下。選手も大変だが観客も大変だ」である。設備の不十分さが、サッカーに馴染みの少ない層の動員に影響するのは否めない。観客の少なさから行政も設備投資に慎重にならざるをえないという状態である。鴻ノ池陸上競技場（最大5千人）では何とかJ3まではいけるが、J2は収容人員1万人以上、J1は1万5千人という壁がある。

奈良市ポイント制度の加盟店はこのキャラクターが目印

奈良市は2015年1月から、市民が市内の加盟店で買い物をしたり、介護予防に関する事業に高齢者が参加したり、また一般市民が健康増進活動やボランティア活動に加わったりするとポイントがもらえる「奈良市ポイント」制度を始めた。単なる買い物ポイント制ではなく、非営利の活動にも活かせる制度である。奈良市内で行われる奈良クラブのリーグ戦（当日料金大人1500円）のチケットを買えば100ポイント、つまり加盟店でならこれで100円分の買い物ができるというわけである。通常なら1万円分の買い物に相当する。これはバンビシャス奈良の奈良市内の試合でも適用される。運営事務局では「地域社会に貢献する人たちに与えられる一種の地域通貨の仕組みといえます。スポーツ観戦も町おこしの一つです」と話す。

地道な努力を積み重ねることで奈良クラブの運営基盤は安定し、それが選手強化にもつながり、観客も増え、施設もそれにふさわしい立派なものに替わる。そんな上向きの循環が奈良という地域社会で起きることを期待したい。

広がる奈良のスポーツ文化

地域密着型スポーツグラフィック誌登場
「エールスポーツ奈良」創刊

奈良県内のプロ・アマのスポーツの話題を満載した隔月刊スポーツグラフィック誌「エールスポーツ奈良」が8月25日に創刊した。東京の三栄書房が発行所だが、発行人は明新社（奈良市）の乾昌弘社長。編集・取材はタウン情報誌「ぱーぷる」を発行するエヌ・アイ・プランニング（生駒市）が担い、営業は株式会社リアクト（奈良市）という地域密着型の発行体制だ。

創刊号（9―10月号）は、バンビシャス奈良、奈良クラブ、シエルヴォ奈良の代表・GMに加え、バレーボールのVチャレンジリーグⅡに今年秋から参戦する奈良NBKドリーマーズの鹿谷明生監督が語り合う発刊記念対談「奈良のスポーツ文化をつくろう」を掲載。4人は、合同練習などで競技同士が交流して子供たちが複数のスポーツをする機会を増やすことなどで意気投合した。また、4チームの主な選手も紹介している。

創刊された「エールスポーツ奈良」の表紙

このほか、高校総体県代表13チーム、県知事杯中学生硬式野球選手権大会出場27チームの紹介。県中学校総合体育大会の写真と結果など128ページにわたり盛りだくさんな内容だ。10月24日発売予定の11―12月号では、春高バレー県予選の注目チーム紹介などを掲載する。

「エールスポーツ」は山梨、静岡、千葉、青森に次いで8月に奈良と福岡で発刊された。リアクトの森康祐さんは「奈良は野球グローブの主産地でユニホームやソックスの会社もある。スポーツ関連産業なども取り上げてみたい」と話す。県内のコンビニや書店で750円（税込み）で販売。

奈良にスポーツ応援文化の息吹を
サッカーの応援から得る奈良への帰属意識

奈良クラブサポーターグループNaLa12代表　生駒　義博

いこま・よしひろ
生駒市在住・学習塾経営・33歳・一児のパパ

NaLa12（ナラドセ）は2008年発足の私設応援団。選手やチームの応援歌を作っているほか、チームとは別に「ナラサポTV」という番組をYouTubeで展開。また、県内各地のお店などに広報誌「ナラサポ！」が置かれている。

コールリーダーとして、応援団を率いる。チーム創設当時、自分一人から応援を始めたリーダーに、仲間たちからの信頼は厚い。

草サッカーからの出発

奈良クラブの応援を始めてもう7年が経ちました。奈良クラブがその歩みをスタートするまでは、私は一介のサッカーファンであり、Jリーグのとあるクラブのサポーター（応援団）の一員でした。奈良でJリーグを目指そうという機運など当時は皆無で、まさにテレビゲームの中の話。そんな折に、現在奈良クラブのゼネラルマネージャーを務める矢部さんと知り合う機会がありました。彼がその場で話してくれた「奈良でJリーグを目指すクラブを作りたい」という話に対して、「本気でやるなら、本気で応援します

Jリーグやジェフのサポーターが集ったイベントに出演中。多忙な本業の合間をぬって、PRに努める。

よ」と言ったのが始まりでした。確か2006年のことで、ちょうど矢部さんがサッカー選手を引退して、奈良に帰って来たタイミングでした。

2008年、チームは土のグラウンド、雨天中止は当たり前、人数は揃わない、そんな「草サッカー」からスタートしました。この数年でJリーグの一歩手前まで歩みを進めたことは本当に感慨深く、そのスピード感に驚いています。それも応援をしてくれる多くの人たちが試合会場に集まるようになり、試合会場以外でも多くの人々が注目してくれるようになったからです。私一人で現場での応援を始めた奈良クラブが、現在ではJリーグ昇格のために必要な条件の一つである平均観客動員2000人を現実的に狙えるようになっています。奈良クラブは奈良を代表するスポーツチームとして着実にその歩みを進めています。

応援の向こう側にあるもの

私自身、高校時代から県外の学校に通い、大学、そしてその後の就職も県外でした。社会人になった頃、多忙な毎日の中で、休日を奈良で過ごすのが悪くないと思い始めたのです。奈良には日本人が誰でも郷愁を感じる日本の原風景が詰まっていると思います。地元への何とも言えない気持ちがこみ上げ、休みの日にわざわざ大阪や京都に出て行くよりも、奈良で過ごす方が精神的な安らぎを得るようになりました。ちょうどこのタイミングで奈良クラブを応援することになり、その応援活動は更に奈良への帰属意識を明確にしてくれたと思います。今ではしみじみと思います。「ああ、奈良という共通項でこれだけの人が集まり、何かに熱狂できるのだな」と。

それが奈良クラブの場合、手段がサッカーであり、バンビシャスさんのようにバスケットボールでも良いと思います。それらスポーツを通して一人一人が盛り上げようとするアクションが地域を活性化していくことになると信じています。サッカーの応援の向こう側に、人々を結び付け、地域に活力を与える可能性があるはずです。皆さんもサッカーの応援を通して、奈良を盛り上げていく術を一緒に考えていきませんか。

地方都市・奈良の地元愛を引き出せ！

奈良県初のプロチーム バンビシャス奈良

奈良県出身の笠原太志選手（26）＝G（左）と、辻屋健選手（23）＝G（右）

地域密着型スポーツの意義を熱く語るバンビシャス奈良の加藤真治・代表取締役＝奈良市餅飯殿町の球団事務所で

新潟「朱鷺メッセ」の熱気に感動

bjリーグ西地区のバンビシャス奈良の代表加藤真治は２００４年12月、新潟市の複合型コンベンション施設「朱鷺メッセ」で行なわれた「新潟アルビレックスＢＢ」のホームゲームを観戦した時、「地元チームを熱心に応援する地方都市の市民の地元愛」を感じた。Ｊリーグ・アルビレックス新潟のサポーターも加わり、バスケ・ファンでもない市民たちの熱気に包まれ、４千人の観客席は２日連続で満員であった。加藤をこの試合の観戦に誘ったのはbjリーグ仙台８９ＥＲＳ代表の中村彰久であった。

「仙台89ERS」で培われた地元への思い

中村は東京大バスケ部出身で、京都大ＯＢの加藤の１年先輩。京大と東大は毎年、七大学戦や対抗戦で交流がある。七大学戦とは、国内７つの旧帝国大学の運動部が毎年、ボート、陸上、柔道など各種目で競い合う大会である。中村は東大大学院博士課程でスポーツ社会学を研究しながら東京海上バスケ部のコーチを兼任し、米国にコーチ留学した経験もある。

２００４年に故郷・仙台で運営会社仙台スポーツリンクを設立。２００５年開始のリーグに参入した。加藤を誘ったのは、仙台８９ＥＲＳの立ち上げに加わってもらうためであった。廃部した実業団チームを引き受けてできたプロチーム第１号が新潟であり、２００４年当時はまだ実業団のリーグに参加していた。

加藤は１９７１年生まれ。奈良高校から京大に進学し工学部と大学院で数理工学を専攻。住友銀行（現三井住友銀行）に入社後も実業団でバスケを続けた。仕事では新商品の開発を担当しベンチャー企業にも興味を持った。加藤は約半年間悩んだ末に２００５年に退社し、仙台スポーツリンクの取締役になった。それを決心させたのが新潟での観戦である。

加藤は、仙台で暮らした６年間でプロスポーツが地域社会に果たす役割の大きさを感じ取り、「故郷の奈良でもプロチームを起こせないか」と思い描くようになった。奈良でも「奈良県にプロバスケットボールクラブをつくる会（ナラプロ）」が２００５年に発足したが、bjリーグへの参入申請はことごとく落選。しかし、加藤が２０１１年１月にナラプロ代表に就任するとにわかに活動が活発になった。

「覚悟を決めて頑張る人を応援したい」

そんなとき、「この人に相談してみたら」と紹介されたのが、読売奈良ライフ社長兼編集長の朝廣佳子であった。同年３月10日、奈良市の事務所を〝飛び込み〟で訪問すると、朝廣はじっくり話を聴いてくれ、経済界の人物や企業を紹介してくれることになった。ところが翌日、東日本大震災が発生。加藤はいったん仙台に帰ったが、７月になって朝廣に連絡すると、「いつ奈良に来るの？」と、待ち望んでいたような反応だったという。朝廣に励まされて、地元企業の経営者に支援を訴えると「このままでは奈良は沈む。やらないとあかんと思っていた」という人が結構多かった。

朝廣は「加藤さんの純粋な気持ちと行動力に心打たれ、覚悟を決めて頑張る人を応援したいと思いました。私自身、奈良で初めてイベントをさせてもらったとき、多くの方に助けてもらいました。うまくいくかどうかよりも、その人がどんな思いで取り組んでいるのかの方が私には大事です。それに奈良に初のプロバスケチームなんて、わくわくするじゃないですか」と言う。

広く薄く応援して地域の連帯感を育てよう

朝廣自身にも思いがあった。岡山出身の朝廣は、奈良の持つ独特のクールな雰囲気が気になっていた。１９８８年に「古都奈良の文化財」が世界遺産に選ばれても奈良全体を覆うような連帯感が感じられなかったのである。大阪や京都に通勤・通学する「奈良府民」が多いせいであろうか？朝廣は１９９９年夏に始まり、今や「奈良公園の風物詩」となった「ならー燈花会」を成功に導いた人物である。燈花会は10日間の期間中、毎日３００人のボランティアが灯明に火を灯す。ボランティアに不熱心な土地柄ではない。

朝廣は、「プロバスケの１チームの選手は10人ほどと少なく、雨の日も試合が可能。少ない経費で継続的に事業を行い、地元のみんなが広く薄く応援し連帯感を育てられるのではないか」と計算する。また、全国各地を回ってきた朝廣は、地元への思いや連帯感の有る無しで、「おもてなし」に差があることも感じていた。

bjリーグ２年目の２０１４―２０１５年シーズンのバンビシャスは西地区10位。観客動員もホームゲーム26試合で３万６４９４人、１試合平均１４０４人と、まだまだ〝発展途上〟であるが、今年４月19日のシーズン最終ゲームには２７７４人の観客数を記録。応援する地元企業などチームパートナーも２１９社と前年（１０１社）の２倍を超えた。

バンビシャス奈良の公開練習には熱心なブースター（ファン）がコートわきで写真を撮ったり声援したり＝天理市立総合体育館で

開幕への意気込みを伝えるバンビシャス奈良のポスター

今シーズン、チームを牽引すると目される３選手。左から本多純平選手（26）=F、寺下太基選手（35）＝F、鈴木達也選手（24）＝PG

5千人以上収容できるアリーナ建設の実現を！

しかし、大きな課題がある。試合会場である。バンビシャスの本拠、奈良市中央体育館の収容人員３千人は、来年始まるトップリーグ1部の基準（５千人）を満たしていない。２部から出発するバンビシャスの成績が良くなっても、このままでは1部昇格ができない。そこで、バンビシャスは「奈良県に５千人以上収容できるアリーナ建設の実現を！」呼びかける署名運動を展開し、７月には１万４７００人の署名を県に提出した。

プロバスケットボールの認知度を高め、観客を増やす努力は必要であるが、これだけでは５千人収容のアリーナの維持管理はできない。各種スポーツに加えて参加者が多い学会や国際会議や国際展などの誘致が可能な「複合型施設」にする必要がある。

例えば、「柔道で五輪３連覇をした野村忠宏さんを記念する柔道の世界選手権、ボクシング金メダリストの村田諒太選手の世界戦、堂本剛のコンサートなどを想定している」と加藤は言う。バスケの試合はそれらの間を埋めてオールシーズン使う。「ゲームが終れば、飲食街に繰り出せるような場所が理想的」と夢を語る。アリーナができれば、多くの人が集まる行事が奈良で開かれるようになり観光客も増える、といった相乗効果が期待できるという。

地元開幕戦は10月

２０１５―２０１６シーズン（来年４月まで）のホームゲーム初戦は10月10、11日、橿原公苑第一体育館で大阪エヴェッサと、地元第２戦は同月24、25日平群町総合スポーツセンターでライジング福岡と、同第３戦は11月７、８日奈良市中央体育館で京都ハンナリーズと対戦する。

「自転車文化」は奈良という最適な環境に育まれる

シエルヴォ奈良サイクリングチーム

「奈良ほど自転車に向いているところはない」と断言するのは、奈良市在住の自転車デザイナーで東京サンエス west代表の上司辰治（50）だ。町家の活用などに取り組む地域団体、NPO法人「さんが伸座」理事であり、国交省の社会実験を経て奈良にレンタサイクルを定着させるなど、奈良の「自転車文化」の仕掛け人の一人である。

そんな文化をサイクリングプロチームとして牽引しているのが「シエルヴォ奈良」（横山光太郎代表）だ。2010年に発足し、翌年からジャパン・プロ・ツアーのロードレースに参戦し、現在の選手は10人である。週末ごとに、プロツアー24戦をはじめ沖縄から北海道まで転戦し年間約30レースをこなすほか、「ツアーオブ奈良」「グランフォンドイン吉野」という市民参加のイベントではサポート役にまわる。

横山光太郎代表

JPT 開幕戦「宇都宮クリテリウム」を走る小渡、西沢、中川智、小西優大の各選手（右肩にシエルヴォ奈良のワッペン）

「地域密着型」で社会貢献するプロチーム

サイクリングは、観客から入場料を徴収できないので「見る」より「やるスポーツ」だ。シエルヴォ奈良も、正式名は「シエルヴォ奈良MIYATA-MERIDAレーシングチーム」と、器材などを支援するサプライヤーとして自転車販売会社のミヤタサイクルや台湾の自転車メーカー「メリダ」とネーミングライツ契約を結び、オフィシャルスポンサーがダイワハウスなど3社、それに地元中心のスポンサーが20社という態勢だ。

横山は「奈良では、大企業の『お抱え』というわけにはいかない。自転車はエコにもつながる。市民との交流を深めて地域密着型で社会に貢献したい」と話す。

いま取り組むのは来年、ジャパン・プロ・ツアーを奈良で開催すること。

エイドと呼ばれるステーションでは、手作りのシフォンケーキやかき氷で選手らを支援＝宇陀市の「たかぎふるさと館」

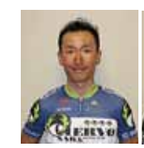
「ツアー・オブ・奈良・まほろば」で疾走する「宇陀サイクリングコース」の選手たち＝宇陀市内

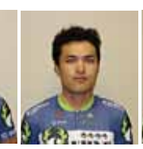
計画では大和郡山市の「健康まほろばパーク」などの周りを周回するコース（約3㌔）を予定している。まだ、奈良マラソンのように国道などの主要道路を一時通行止めにして開催するには「まだまだ認知度が低い。県民にもっとアピールしたい」と横山は言う。

「ツアー・オブ・奈良・まほろば」

9月6日、地域密着をコンセプトに掲げるシエルヴォ奈良が実行委員にも加わった地域イベント「ツアー・オブ・奈良・まほろば」が、開催された。宇陀市大宇陀拾生の「心の森総合福祉公園」をスタートし3つのコースに分かれてサイクリングを楽しむ。今年で3回目。

いちばん短い宇陀サイクリングコースが34㌔、曽爾・御杖コースは192㌔の「山岳グランフォンドイン吉野」、9月13日には、上北山村で標高差1240㍍の「ヒルクライム大台ケ原」も開催された。奈良は、豊かな自然や伝統的な町並みなど美しい景観に囲まれ、平地もあれば、なだらかな丘陵、本格的山岳コースまで多様なサイクリングが楽しめる。そんな環境や指導者に恵まれ、榛生昇陽、奈良北など、高校の自転車競技も全国トップレベルである。


山下貴宏選手


小渡健悟選手

西沢倭義選手

奈良のお坊さんは〝作法〟よく自転車に乗る？

上司には、もう一つ〝仕掛けている〟？ことがある。「お坊さんが自転車に乗る」である。

上司自身も、自転車好きの兄の上司永照・東大寺教学執事に影響されて自転車関係の仕事をすることになった。そんな人脈から、辻村泰善・元興寺住職、河野良文・大安寺住職、倍巌良明・法徳寺住職など、奈良の名刹の著名な僧侶たちがサイクリングを楽しむ。上司は「自転車の乗り方にも〝作法〟がある。例えば、自然を感じながら自分の足でリズムよく乗ることで自分自身を取り戻す」などと自転車による体と心の修養の意義を強調する。

もっとも「ツアーオブ奈良」の副実行委員長を務める倍巌住職は「辰治さんに勧められたから自転車を始めただけ。作法？意識していません。でも、乗っている間は心が無になりますね」と話している。

サイクリングに出発前の河野良文師（左）と倍巌良明師＝奈良市の大安寺前

サイクリング中の倍巌良明師

サイクリング大会では、地元産の食材でおもてなし

エイドの一つ、出発地点から約20㌔の「たかぎふるさと館」で待ち構えていると、宇陀コースのライダーの先頭が出発1時間あまりで到着した。「坂がきつい」と火照った体をかき氷で冷やしたり、住民手作りのシフォンケーキで栄養を補給したり。男女を問わず、子どもも大人も続々と到着するなか、疲労困憊で自転車を引きながら徒歩でやっとたどり着くような〝初心者〟もいる。本格的なサイクリング用自転車もあれば、ミニサイクルで頑張る人もいて、自転車の文化の広がりが垣間見えるような場面であった。

今年は他に、7月12日に吉野町を中心に紀伊山地を駆け巡る最長72㌔、東吉野村から奈良市の布目ダムを回って戻る東吉野・山添コースは103㌔という、東部山間の起伏に富んだロードに雨中にもかかわらず、約800人が挑んだ。途中には、「エイド」と呼ばれるステーションがあり、地元住民や団体が、飲料水のほか、それぞれ肉厚の鮎の塩焼き、柿の葉ずし、串こんにゃくなど、地元産の食べ物を提供して大会を盛り上げる。

広がる奈良のスポーツ文化

施設の整備は「これから」、奈良市は優遇税制で支援

県と奈良市による支援態勢

奈良クラブやバンビシャス奈良の今後の課題は、収容人員がもっと多く照明などの設備が整ったスポーツ施設が必要なことである。

県スポーツ振興課は「施設の整備が必要なことは充分承知しリサーチもしている」と話すが、具体的な場所や構想となると、「県内各地で誘致の声があるので具体的に決めるのはこれから」という状態である。一方、自転車道も「嵐山から木津川市までの自転車道は公道を横切る個所が2ヵ所しかない」（倍巌住職）という京都府と比べると貧弱だが、同課によると「京阪奈自動車道沿いに京都から県内を通り和歌山を結ぶコースをつくる計画があるが、まだ時間がかかる」と言う。

県はスポーツ振興計画の「あこがれ、感動を生むスポーツ」に基づいて、この3チームのほか、バレーボールの奈良NBKドリーマーズ、南都銀行ホッケーチーム、相撲・幕内力士の徳勝龍を支援している。一方、奈良市は「スポーツでまちづくり」を掲げ、3チームを「ホームタウンスポーツパートナー」に認定。さらに、奈良クラブとバンビシャス奈良については、「心のふるさと応援寄付」という優遇税制を適用している。例えば、「奈良クラブへの支援」を選択して市に3万円を寄付すると住民税特別控除などが受けられ、奈良クラブの支援に2万円、市スポーツ振興事業に1万円が活用される仕組みだ。このほか、県や奈良市では、各種イベントや啓発ポスターに選手を登場させるなどして応援している。

奈良市がホームタウンスポーツパートナーとして応援する3チームのエンブレム入りステッカー